







**土**方巽(1928-1986)は、身体表現の世界にまったく新しい表現世界としての「舞踏」を提示し、確立した舞踏家として知られています。土方は秋田市に生まれ育ち、県立秋田工業高校を卒業、市内でモダンダンスを学んだ後、20歳の頃から上京と帰郷をくりかえしながら様々なダンスを学びます。1959年(31歳)に暗黒舞踏の最初の作品となる「禁色」を発表。過激で鮮烈な舞台は、多大なインパクトあつたダンサーとしての地位を築きます。さらに既成のダンスを退けた前衛的で実験的なダンスを志向した創造活動を行い、68年の公演「肉体の叛乱」をもって舞踏を確立しました。

**1970**年代には、北国秋田の風土を背景に、日本人特有の肉体に新たなダンスの基盤を見だし、西洋のダンス概念を覆す舞踏を追求、その最初の成果が「癩瘡譚」でした。土方巽が創造したダンスは、「BUTOH」としてヨーロッパでブームを巻き起こし、世界の舞台芸術の一潮流となりました。

土方巽の暗黒舞踏には、写真家の細江英公、作家の三島由紀夫や辻澤龍彦、美術家の中西夏之や横尾忠則といった多くの前衛芸術家が、舞踏のために文章を寄せ、舞台にのせる美術作品を制作し、公演ポスターをデザインし、土方の踊りをカメラに収めました。舞踏というひとつの身体表現のジャンルにとらわれず、美術や写真・映画など多くの前衛芸術家と深く結びついた至高の世界が存在しました。



ポスター「静かな家」  
デザイン：田中一光  
写真：山崎博1973



ポスター「カラダダンス」  
デザイン：横尾忠則1965

## 企画展示

# 土方巽・舞踏の世界



「骨髄身砕死人惑」での土方巽  
撮影：細江英公1970



舞台幕「助産判断」制作：赤瀬川原平1965



舞台装置「ビクターの犬」  
制作：中西夏之



「癩瘡譚」撮影：小野塚 誠1972



「肉体の叛乱」撮影：長谷川 六1968



玉野真市に振り付ける土方巽  
撮影：細江英公1972

**秋**田では23年ぶりとなる土方巽展。新しい土方巽像を表現することを目指す展覧会を実現します。創造と、とりわけ、ダンスをたどり、土方舞踏史を初期の舞踏の母胎として生地秋田に注目します。土台装置で紹介し、後期の深化と表現の多様性を写真や舞踏の言葉で映像や詩文で蘇らせます。

秋田初公開もある写真やポスター、舞台装置や舞台衣裳、映像や言葉など多彩な表現の世界から舞踏誕生の現代意義を探ります。

秋田の秋田の原風景に出会いたいと思いませんか？  
少年土方巽を育み、「病める舞姫」の自然な村や、世界の傑作写真集「録画」を生んだ自然をもう一度見つめ直します。

**舞踊**  
踏フェスティバル  
in AKITA

# Tatsumi

平成26年

**10月23日** 木 = **28日** 火

10:00~16:30(入場は30分前)

**秋田市文化会館 地下展示ホール★入場無料**

企画：舞踏・舞踊フェスティバル in AKITA企画委員会／慶應義塾大学アート・センター 土方巽アーカイヴ(森下 隆)

協力：特定非営利活動法人舞踏創造資源／土方巽記念秋田舞踏会

## 第29回 国民文化祭秋田市実行委員会

【主催者】文化庁／秋田県／秋田市／秋田市教育委員会

第29回国民文化祭秋田県実行委員会／第29回国民文化祭秋田市実行委員会

【問い合わせ先】第29回国民文化祭秋田市実行委員会事務局（秋田市国民文化祭推進室内）

〒010-8560 秋田市山王 1-1-1 TEL.018-866-8782 FAX.018-866-2458

E-mail kokubunsai@city.akita.akita.jp

秋田市 国民文化祭あきた2014 ウェブサイト

国民文化祭 秋田市

検索

www.akitacity-kokubunsai2014.jp





昨年の上小阿仁プロジェクト、  
国民文化祭プレ公演での金粉舞踏のメンバーが再び登場！  
磨赤兒率いる「大駱駝艦」の秋田特別公演！

日時◎平成二十六年十月二十六日(日)  
午後二時開演(開場は三〇分前)  
会場◎秋田市文化会館・大ホール

振付・演出：磨 赤兒  
出演：  
磨 赤兒

村松卓矢  
田村一行  
松田篤史  
塩谷智司  
奥山ばらば  
小林優太  
我妻恵美子  
高桑晶子  
鉾久奈緒美  
藤本 梓  
梁 鐘譽  
伊藤おらん  
齋門由奈  
岡本 彩  
三田夕香

音楽：土井啓輔  
衣裳：堂本教子  
美術：安部田保彦  
舞台監督：中原和彦  
舞台監督助手：田中 翼  
大道具：  
渡部景介  
湯山大一郎  
若羽幸平  
小田直哉  
照明：森 規幸 (balance,inc.DESIGN)  
照明操作：田端真実  
音響：及川誠之 (SHOW-YA project)  
制作：山本 良  
プロデューサー：新船洋子

# 大駱駝艦・天賦典式

大駱駝艦 プロフィール  
1972年創設。磨赤兒主宰。  
その様式を天賦典式(てんぶてんしき:この世に生まれ入ったことこそ大いなる才能とす)と名付け、常に忘れ去られた「身振り・手振り」を採集、構築しすでに60を超える作品を生み出している。1982年舞踏カンパニーとしては、初のフランス、アメリカ公演を行い、鮮烈なインパクトを与え広く「Butoh」を浸透させる。大駱駝艦では若手舞踏手育成に力を注ぎ、山海塾の天児牛大、室伏鴻など、数多くの舞踏グループを輩出してきた。現在、吉祥寺を拠点とする大駱駝艦スタジオ「壺中天(こちゅうてん)」において所属メンバーによる様々なユニットの作品を上演し続けている。一般の人を対象にした舞踏ワークショップ「無尽塾(むじんじゅく)」、夏は長野県白馬村において合宿を実施している。1974年、87年、96年、99年、07年舞踏批評家協会賞受賞。

灰の内蔵は極彩色の宮殿である  
だが今 その関節は炎症をおこしている  
治してやって また戦場に送らねばならぬ  
世界の実りの豊穡のために

磨 赤兒

# 灰の人

秋田特別公演

上演作品「灰の人」  
2011年3月17日〜21日世田谷パブリックシアターにて初演、  
その後11月にはパリ(フランス)公演、  
2012年10月にはメキシコシテイ(メキシコ)公演を行い、  
各地で大好評を得た作品。

「灰の人」とは

もはや燃え尽きた「灰」か、一切を灰にして黄泉がえるのか、  
滅びと再生の物語である。  
重方から解放された「灰」、そして大地に降り落ちる  
「灰」・「生の灰」・「死の灰」。

その灰はトリッキーで不可解である。

つまり「灰」は強大な非存在を司り、あらゆる存在を翻弄する。

そのシレンマを大いに遊ぶのが、今回の「灰の人」のをどりである。

磨 赤兒(まるあかじ) プロフィール  
1943年生まれ。奈良県出身。  
1965年、唐十郎の劇団「状況劇場」に参画。磨の「特権的肉体論」を具現化する役者として、60〜70年代の演劇界に大きな変革の嵐を起し、多大な影響を及ぼす。

1966年、役者として活動しながら舞踏の創始者である土方巽に師事。  
1972年、舞踏カンパニー「大駱駝艦(だいらくだかん)」を旗揚げ。

舞踏に大仕掛けを用いた圧倒的スペクタクル性の強い様式を導入。「天賦典式」(てんぶてんしき)と名付けたその様式により日本はもちろん、1982年のフランス・アメリカ公演で大きな話題となり、「Butoh」の名が世界を席卷する。磨赤兒の考え方である「一人一派」を実践、山海塾の天児牛大、室伏鴻など舞踏集団、舞踏手を多数輩出しており、現在、東京・吉祥寺にあるスタジオ「壺中天(こちゅうてん)」を拠点とし様々なユニットを内蔵し、大駱駝艦・天賦典式公演並びに壺中天公演を精力的に行っている。

役者としての活動も著しく、特に映画においては「月はどっちに出ている」「菊次郎の夏」「KILL BILL」「まほろ駅前多田便利軒」などの超大作話題作、若手監督作品に立て続けに出演しその独特の存在感は、今日の映像界にはなくてはならない存在となっている。TVでは「軍師官兵衛」、「花園オールドボーイ」、舞台では「毛皮のマリー」、「ジパンク・パンク〜五右衛門ロックⅢ」「荒野のリア」に出演するなど、役者として新境地を慕進している。

舞踏家としては、2013年モンペリエ・ダンス・フェスティバル(フランス)、ノルマンディ・フェスティバル(フランス)、マドリード・ダンス・フェスティバル(スペイン)で公演を行い大きな評価を受け、2014年メキシコでの公演が決定している。  
2006年度文化庁長官賞受賞。

秋田のみなさまへ  
我が師であり、舞踏の創始者・土方巽の生誕・揺籃の地、秋田にて  
我が大駱駝艦の公演を行えますことを、大変光栄に思っております。  
古き日の厳しい秋田の風土を背負い、世界のダンスシーンに革命的激震を走らせ、  
舞いきった師の想いを、我々もまた背負い、  
皆さまの前に舞踏体を供物として捧げる所存であります。  
しかと受け取って戴ければ幸いです。  
磨 赤兒 (大駱駝艦主宰・舞踏家・俳優)

舞踏  
踏フェスティバル  
in AKITA

国民文化祭  
あきた2014

チケット料金◎一般/前売2,200円・当日2,500円(各税込)  
大学生以下/前売1,200円・当日1,500円(各税込)/全席自由  
チケット発売◎ローソンチケット/caoca広場(秋田駅トピコ内)9月1日発売開始

撮影：荒木経惟2012